

## ● 制作

### 山梨県甲州市勝沼地区のテロワール

Katsunuma terroir

保阪 日南子 園芸学研究科 ランドスケープ学コース 環境造園デザイン学領域 (主指導教員: 武田史朗)  
HOSAKA Hinako

#### 1. 研究の背景と目的

戦後から現在に至るまで、多くの観光地が整備されてきた。観光業は利益を生んでおり、その土地特有の風景を見せる美観的価値や学術的価値が指摘されている<sup>1)</sup>。勝沼地区に葡萄がみられたのは平安時代後期とされ、勝沼地区と葡萄の歴史はおよそ 1300 年の歴史がある<sup>2)</sup>。自然の過程に人為的な介入を行うことで、特殊な景観形態が形成され、生態学価値に加えて、地域の文化や歴史的価値を持つ勝沼地区のテロワール(ブドウ畑を取り巻く自然環境)ができる。

明治維新勝沼地区の葡萄畑は増え、人々の「食」を支える観光対象地となっている。一方、勝沼地区のテロワールは地域の暮らしの中自然発生的形成されてきたため同地区の美しい風景を生かし切れていないと考える。ワイナリーや酒造工場、流通の仕組みも変化し、時代とともに農業経営形や生活様式も変わっているなかで葡萄畑を過去の手法でそのまま造っても、現代の人々に強く訴えかける空間にはならないのではないか。

本研究では、葡萄畑の「人工性」「観光性」といったその造形の背後にある意図を理解し、葡萄畑風景の本質まで推測し、現代の文脈に合わせた産業景観からの再解釈を試みる。そして、勝沼地域の観光動線を設計する。

#### 2. 研究の方法

以下に研究の方法と流れを示す。

甲州市勝沼地区は、日本の葡萄栽培とワイン産業の発祥地として長い歴史を持つ地域である。この地域の特性を理解し、設計提案に反映させるため、まず文献調査や甲州市教育委員会や葡萄畑関係者への取材を 2024 年 5 月に J A 菱山の職員様に行い、勝沼地区の歴史的背景を明らかにする。さらに、ワイナリー関係者への取材では、ワイン制作の工程、貯蔵技術、搬出の仕組みについてくらむぼんワインの野沢様にお話を聞き、調査する。これらの知見を基に、勝沼の自然、文化、産業を活かした持続可能な地域発展を目指し、具体的な設計提案を行う。この提案により、勝沼地区がさらに魅力的で価値ある地域となることを目指す。

#### 3. 勝沼地区地域に関する調査

##### 3-1. 勝沼地区地域と葡萄畑

勝沼地区は平安時代に日本の固有種「甲州葡萄」が一部の傾斜地で栽培されており、江戸時代甲州街道の勝沼地区宿のお土産「水菓子」として流行。明治期の近代化に伴い日本初の民間ワイン醸造所が設立した<sup>4)</sup>。

勝沼地区には現在、約 140 種類の葡萄が 58.3ha の畑で栽培されている。この広大な畑の中には約 30 社のワイナリーが点在し、四季折々の表情を見せる葡萄畑の風景を楽しむことができる。訪れる人々は、葡萄の品種や醸造元、さらには醸造年の違いによって多彩な味わいを見せるワインを味わうことが可能である。中でも、日本最古の葡萄品種とされる「甲州種」を用いたワインは、近年醸造家たちの努力によってその品質が向上し、海外にも輸出され高い評価を得ている。甲州種のワインは、その独特の風味と日本の風土を反映した味わいが特徴であり、日本ワインを代表する存在となっている。

江戸時代から続く葡萄栽培の歴史と、明治期に誕生したワイン産業は、勝沼地区において切り離すことのできない密接な関係を築いてきた。これら二つの文化は、互いに影響し合いながら地域の発展を支えており、勝沼地区を日本で最も有名な葡萄とワインの産地へと成長させた。その結果、この地域特有の農村景観が育まれた。葡萄畑が織りなす美しい風景は、農業と観光の融合を象徴し、多くの人々を惹きつけている。

##### 3-2. 勝沼地区葡萄畑の変遷

葡萄畑の広がり方を知るため、勝沼地区地域と水田、果樹園、桑畑の変遷を甲州市の土地利用別地図から作成した。(図 1)。1974 ごろは、果樹園と葡萄畑が混在している。平成 29 年頃では宅地化の影響で葡萄畑が減少している。育てている葡萄種にも場合によって違いが見られる。図 2 (J A 菱山の職員様のヒアリングより作成) から、日川を隔てて北は生食用の大粒系が、南部は醸造用の甲州葡萄が多く栽培されていることがわかる。生食用の葡萄畑は 1929 年から 1954 年に水田から果樹園に変化したことがわかる。変遷の要因として葡萄畑の広がりには鉄道や国道の整備、開通に関係がある。

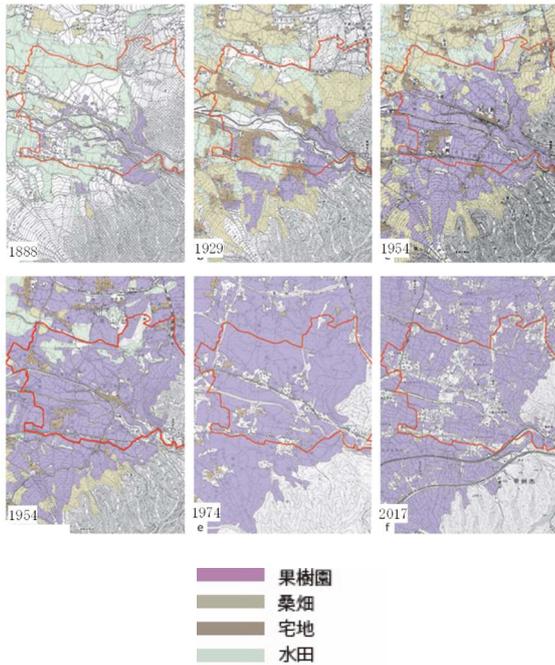


図1 水田, 果樹園, 桑畑の変遷 (赤線は勝沼地区の境界を示す)

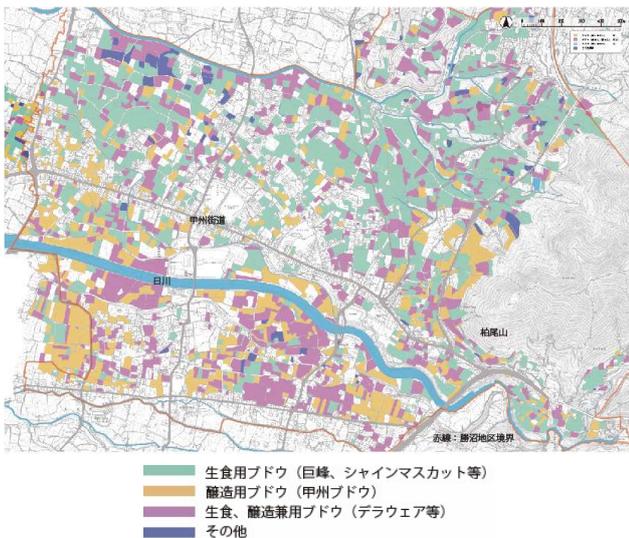


図2 育てている葡萄の用途

### 3-3. 勝沼地区葡萄畑の変遷の社会背景

1888年から1929年では水田が減少し明治初期の殖産興業政策によって桑の木と葡萄の木が植えられていった。1907年と1911年に起きた明治40年日川大氾濫の影響により、日川沿いの水田は流され、土壌が礫で埋もれてしまった<sup>5)</sup>。

1913年に国鉄中央本線勝沼地区駅が開通。今までは馬で隣の塩山駅に運んでいたため日持ちのする甲州葡萄か干し葡萄、ワインの出荷が主であったが、東京からのアクセスが良くなり第一次世界大戦による好景気も相まって観光葡萄園が増加した。第二次世界大戦期には酒石酸の生産と米統制の酒

不足によりワインの需要が高まり、1952年に国道20号線が開通し進駐軍のジュース需要も相まって葡萄畑とワイナリーが急増。1954年にはほぼ葡萄畑に代わっていった<sup>6)</sup>。1970年に大阪万博とワイン輸入自由化が起こりワインブーム到来。高度経済成長期もあり、勝沼地区の観光業が潤った。社会がモータリゼーションへと進む中、運搬も鉄道から自動車へとシフトしていった。運搬所要時間の短縮により生食葡萄が多く生産されるようになった。以上のことから好景気の際交通インフラ沿いから新しい葡萄畑へと変遷していった。それらは観光農園を営んでいる畑が多いため勝沼地区葡萄郷駅周辺と主要道路沿いでは生食用葡萄の畑が多い。日川より南の岩崎地区は江戸時代から甲州葡萄を生産しており、ワイン生産の中心地であったことから甲州葡萄の生産が続けられている<sup>注1)</sup>。

### 3-4. 勝沼地区葡萄畑の本質的価値

日川を境として北側の勝沼地区は甲州街道の街道筋という立地、また宿場町由来という歴史を踏まえ、空間構成も含めて現在でも町場としての性格が強い南側の岩崎は農村的な性格が強い地域といえる。町場と農村が河川を境に近接し、それらが葡萄の生産と販売などさまざまに補完しあって地域が成り立ってきたという点もこの地域の生活・生業を考えるうえで特筆すべきことである。

## 4. 設計

### 4.1. コンセプト：勝沼テロワール

勝沼テロワールとは、山梨県甲州市勝沼町を中心に広がる特有の風土(テロワール)を指す。ここは日本の代表的なワイン産地の一つであり、ワイン用ブドウの栽培に非常に適した環境が整っている。

気候:勝沼は内陸性の気候で、夏は暑く冬は寒いという寒暖差が大きい。この気候は、ブドウの糖度と酸度をバランスよく育むのに適している。

土壌:勝沼の土壌は主に砂質で、水はけが良い。この土壌環境がブドウの根を深く張らせ、豊かな風味を持つブドウを育てる。

地形:甲府盆地に位置し、標高が高いため昼夜の温度差が大きい。この温度差がブドウに鮮やかな香りと風味をもたらす。

歴史と文化:勝沼は日本ワインの発祥地とされ、長い歴史を持つ地域である。1870年代からワイン醸造が始まり、現在も多くワイナリーが伝統と革新を融合させたワイン作りを行っている。勝沼テロワールの構成要素は、単なる自然環境にとどまらず、その地域に根差した歴史、文化、そして地域社会との深いつながりを持つものである。単に物理的な要素を尊重するだけでなく、地域の人々やその生活に密接に関わり、地域社会との共生を意識した活動にまで広がるべきである。地元農産物や地元の食文化と融合した体験型のワイン

ツーリズムを提案する。地域経済の活性化に寄与する可能性がある。勝沼の伝統的な食材を使用したレストランやカフェ、または地域の特産品を取り入れた商品開発は、地域の独自性を打ち出す方法である (図 3)。このような提案は、単に観光客を迎えるための仕掛けではなく、地域住民自身が誇りに思う地域資源の活用にもつながると考える。

#### 4.2. 設計提案

全体マスタープランは、東から西に沿って流れていく日川沿いに遊歩道を設置し、ブドウ畑に残る水制の上をコミュニティスペースとして地域住民と観光客とのふれあいの場とする (図 4)。

日川は、勝沼の地形と気候に深い関わりを持つ川であり、この川を中心に遊歩道を設置することで、地域の歴史や風景、そして自然環境を感じることができる。川沿いの遊歩道は、観光客と地域住民と一緒に歩きながら交流できる場所を提供するだけでなく、地域資源へのアクセスも改善する。遊歩道沿いには、地域のブドウ畑や農作物が見られるため、農業と観光が自然に融合する形となり、観光客にとっても新しい発見がある (図 5)。

かつて交通の要所であった祝橋を下から眺める視点場を作り、明治時代からの流通の進化を感じることができる。(図 6)

勝沼で葡萄が初めて確認されたといわれている旧上岩瀬地区には道の駅を設計する。地域住民と観光客がふれあい、交流できる場として機能する。

水制は、かつての日川と人との歴史を象徴するものであり、その上にコミュニティスペースを設けることにより、地域の歴史と現代の生活が繋がる空間が生まれる。このスペー

スでは、地元の農産物を使ったワインやジュース、食事を楽しむことができる。

地域と観光客が共に歩むことで、勝沼のテロワールがより深く、広く理解される機会を提供する。日川沿いの遊歩道とコミュニティスペースは、自然環境を守りながら地域社会を活性化させ、地域文化を次世代に伝える重要な役割を果たす。地域住民と観光客の交流を深めることで、持続可能な観光と地域発展が実現し、勝沼の魅力をさらに高めることができると考える (図 8)。

#### 5. まとめ

本提案では、勝沼の地域における独自の自然環境を既存の研究から読み解き、ワイン畑や自然環境との関係を反映させた体験の場を配置した。勝沼のテロワールには、自然の力と歴史の力が非常に強く現れており、ブドウ畑の土壌や川の流れ、周囲の山々が生み出す気候と、時代の流れによって変化してきた人々との係りが全体の景観と深く結びついている。これらの力は、ブドウの生育に大きな影響を与えるだけでなく、地域の人々の文にも色濃く反映されている。この力を感じることができる体験の場を配置することにより、訪れる人々は単なる観光以上の深い体験を得ることができる。単に自然環境を守るためだけでなく、地域の文化やコミュニティが自然と共生する方法を提示することを目指す。自然環境に負荷をかけることなく、持続可能な形で地域資源を活用することが、地域の未来に対する責任であり、地域住民や観光客が一体となってそれを守り育てていくことが求められる。自然に身を委ねながらも、少しずつ形を整えていくことで、人々はその地での生活と自然とのつながりをより深く感じることができるようになると思う。

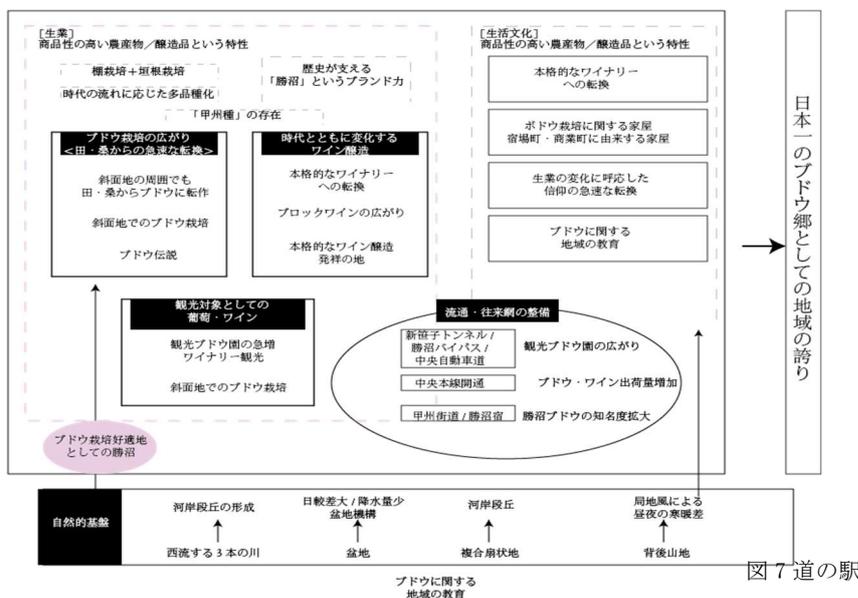


図 3 勝沼テロワールの構成



図4 全体平面図



図5 葡萄畑



図6 祝橋



図7 道の駅

脚注

注1) 2024年5月8日 JA 勝沼地区菱山町にてヒアリングした内容に基づく

引用文献

- 1) 国土交通省 (2006) 観光立国推進基本計画
- 2) 甲州市 (2020) 勝沼地区の葡萄畑およびワイナリー群の文化的景観: 甲州市・甲州市教育委員会
- 3) 仲田道弘 (2020): 日本ワインの夜明け 葡萄酒造りを拓く: 創森社
- 4) 5) 甲州市 (1959): 勝沼地区町誌
- 6) 山梨大学菊地研究室・甲州市教育委員会文化財課 (2019): 「勝沼地区の葡萄畑及びワイナリー群の文化的景観」の本質的価値



図8 設計概念図

(主指導教員: 武田史朗、副主査: 章俊華)